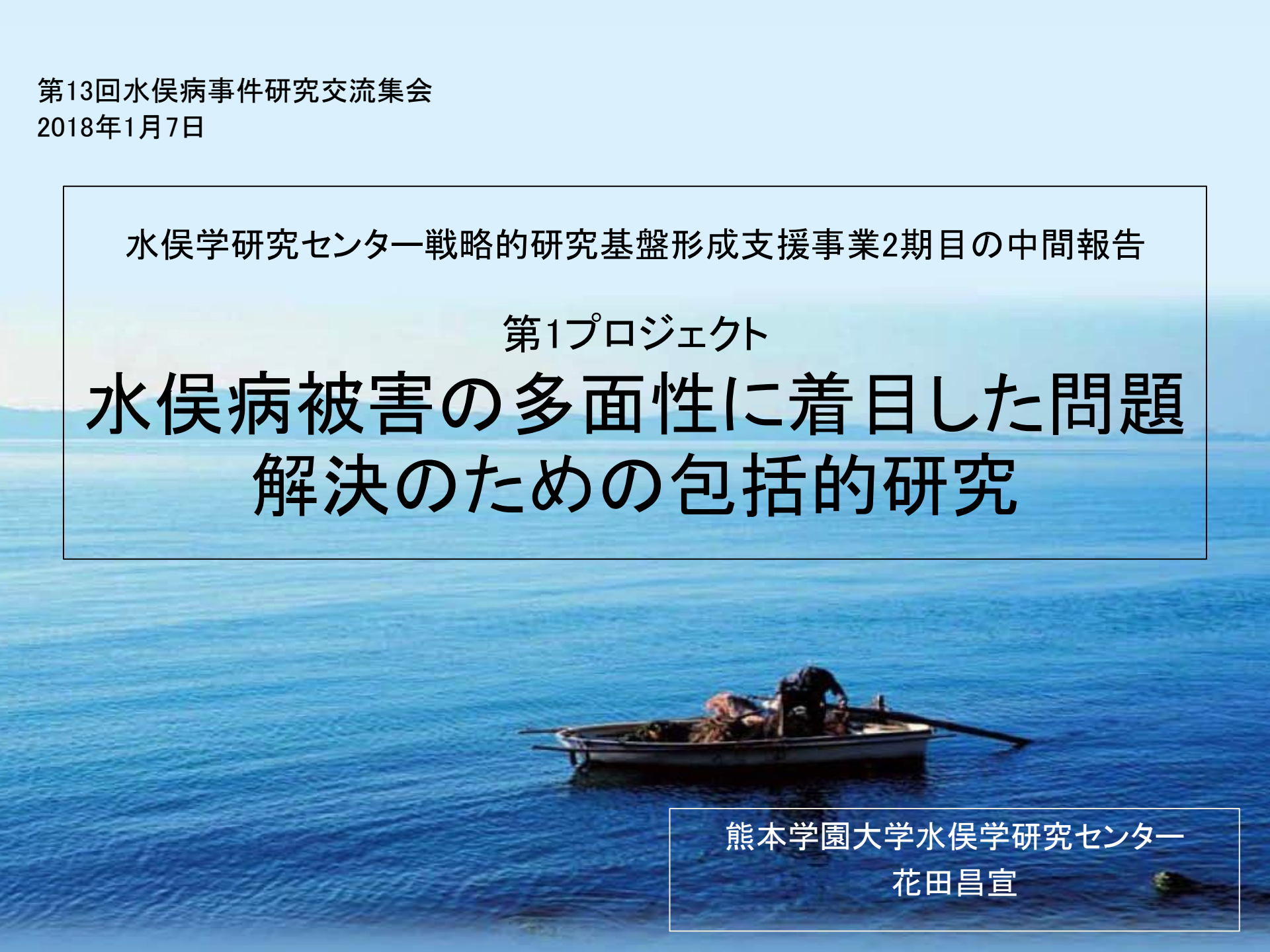
第13回水俣病事件研究交流集会
2018年1月7日

水俣学研究センター戦略的研究基盤形成支援事業2期目の中間報告

第1プロジェクト

水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究



熊本学園大学水俣学研究センター
花田昌宣

原田先生とともに.....そして到達点

1. 原田先生の提唱で始まり、大学研究者、地元の方々、各地の研究者たちと構築してきた水俣学の初心と100年後にも続く水俣学の志
2. 「水俣病は終わらない」を不断に問う姿勢
3. 熊本学園大学水俣学研究センターの15年
4. 地域に根付き世界とつながる水俣学とその独自性と普遍性
5. 「政策提言」あるいは「将来構想」は可能か、必要か
6. そして、その中間報告

水俣病をめぐって起きていること

一. 水俣病訴訟と被告側の主張、国際水銀条約…

二. 地域社会（水俣、不知火海沿岸地域）から水俣病が「消えていく」

三. 水俣病の被害者たちの苦痛、苦悩と共感の欠如

四. 一般論から個別の課題、そして普遍的共有へ、「水俣病学」ではなく「水俣学」たること

五. <u>歴史に学び、現在に向き合い、将来に生かす</u>

水俣学研究プロジェクト

水俣病の経験を将来に活かした地域構想と国際的情報発信のための水俣学研究拠点の構築（2015-2019 ）

- 目標：期待される成果：研究拠点の構築
  1. 研究基盤の形成
  2. 人材育成と情報提供
  3. 政策提言
  4. 国内外のネットワークと情報発信
  - 水俣学の方法に従った、専門家と素人の壁を超え、学問の壁を超え、地域に根ざした発想と理念に裏打ちされた、将来構想にかんする試論を!!。

第1プロジェクト　水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究

- 被害実態の広がり(医学面のみならず社会的側面から)の把握に努め、現在の課題を明らかにする。
- 病いを社会的なものとしてとらえ、医学的な疾患学・症候学から解き放ち、社会環境の中に再定置し、改めて被害実態を明らかにする。
- そのために臨床・疫学調査、被害民／地域住民の社会福祉学的実態調査と補償と救済をめぐる課題の析出、被害住民のナラティブの収集と分析が組み合わされる。

成果：刊行物（2015–2017）

- 『いま何が問われているか 水俣病の歴史と現在』くんぷる、2017年12月
- 『水俣病問題の今』部落解放人権研究所、2017年10月
- 原田 正純『いのちの旅――「水俣学」への軌跡』 岩波現代文庫2016年4月
- 水俣学研究　6号（2015年）、7号（2016年）
- 水俣学資料叢書Ⅵ「不知火海の漁師聞き書き」[2017年3月30日]
- 水俣学ブックレット
  - No.15水俣病60年の歴史の証言と今日の課題[2016年6月23日発行] 花田昌宣・中地重晴編
  - No.14九州・熊本の産業遺産と水俣[2016年3月31日発行 中地重晴・花田昌宣編
  - No.13いのちをつなぐ　～水俣、福島、東北～[2015年3月30日発行]
- 研究員・客員研究員の論文や著作は省略

成果1:
【水俣病公式確認60年アンケート調査】

- 守弘報告および中間報告書を参照

成果:
水俣病発生公式確認60年記念シンポジウムの開催

- 2016年5月に開催予定であったが、熊本地震の影響で2017年2月に、熊本、水俣で開催
- カナダ先住民水俣病被害者らを招聘

成果:
地域における被害調査

成果:
不知火海沿岸漁民聞き取りとその記録の刊行および陰膳調査

成果：
若い世代の患者ヒアリング：胎児性水俣病WG

- 胎児性世代の水俣病を取り巻く課題として、法制度的側面からの検討と病像と被害補償をめぐる問題の検討。主として大阪で水俣病訴訟の弁護団や阪南中央病院の医師グループらとの検討会を行い、行政の施策や資料の検討を実施してきた。
- 医学的検診には、下地明友（研究員）、井上ゆかり・田尻雅美（研究助手）、があたった。ヒアリング作業および資料収集に当ったのは、花田昌宣、研究助手の田尻雅美・井上ゆかり、客員研究員の山下善寛・永野隆文・谷洋一・伊東紀美代・平郡真也らである。

成果：
医療・福祉相談

- 月に二回、現地研究センターで、下地医師を中心に、医療・健康相談を実施。
- 2015年度　開催数10回、累計24人
- 2016年度　開催数13回、累計42人
- 2017年度（12月末）　開催数8回、累計16人
- 在宅訪問が今後の課題

今後の展開

1) 水俣病公式確認60年被害者アンケート調査結果の分析報告。
2) 被害実態ならびに補償救済制度：東京高裁判決、大阪地裁判決などを踏まえた検討
3) 2018年度環境被害に関する第3回国際フォーラム
９月７―９日　熊本・水俣
4) 被害実態調査の継続：漁民聞き取りの継続、生業と水俣病
5) 被害の全体像を示し、レジリアントな地域社会の構築素案

何を問うていくか

- 「水俣学」という方法
- 人材育成
- 研究ネットワーク
- 地域社会における水俣学とは

- 新たな研究基盤と体制の構築　口頭にて